

■ 論文 ■

欧化主義の中心地、東京の明治のリボン産業

Ribbon Industry Development during the Meiji Era in Tokyo,
the Center of Westernization

権上かおる¹⁾、山崎範子¹⁾、菊池京子¹⁾、真鍋雅信²⁾、吉田喜一³⁾

1) Kaoru GONJO, Noriko YAMASAKI, Kyoko KIKUCHI : Yanaka Sawtooth-Roof Heritage Society

2) Masanobu MANABE : THE SHIBUSAWA WAREHOUSE. CO.,LTD

3) Kiichi YOSHIDA : Tokyo Metropolitan College of Industrial Technology

要旨：2013（平成 25）年 9 月、東京都台東区谷中で元リボン工場建屋が解体された。この建屋は、鋸屋根構造であった。この鋸屋根工場は、建屋を所有し使用者でもあった(有)旭プロセス製版会長の田中肇氏、地主であり元リボン工場経営者の子息である鈴木晴雄氏の聞き取り、および建築家等の実測調査から明治期築であることが知られていた。同年 8 月の解体を知らせる看板の掲示後、保存活用を願って地元有志による「(仮称) 谷中のこぎり屋根を愛する有志の会」が発足し、9 月 20 日に鋸屋根構造のわかる部材の一部保管のための取り出し作業後、会名を改め「谷中のこ屋根会」(以下会)とした。会は、鋸屋根部材の一部、洋書を中心とした渡辺四郎の蔵書とみられる文献資料とリボン見本帳、渡辺四郎の自筆ノート、工場で製造されたリボン現品を、元リボン工場経営者の子息である鈴木晴雄氏より譲り受けた。我々は、文献目録の作成、リボンの見本帳調査、関連文献調査、聞き取り調査の中で 2 つのことを発見した。

1. 1894（明治 27）年、岩橋リボン製織所（下谷区谷中初音町 4）は、日本で最初の動力織機によるリボン生産を行った。（注：下谷区は東京都台東区一部の旧名）

2. 経営を引き継いだ千代田リボン製織・製織所（同地）は、大正時代には東洋一の技術であった。

我々は、日本のリボン産業がこの地で始まったのは、東京は西洋文化の入り口であり、中心地であったことが大きいと考える。千代田リボン製織社長、渡辺四郎のリボン見本帳を中心に当時のリボン産業の創成を考察する。欧化主義の中心地、東京という土地ならではの明治のリボン産業について報告する。

キーワード：リボン、細幅織物、渡辺四郎、岩橋謹次郎、渋沢栄一

Key Words : ribbon industry , narrow woven fabric, Shiro Watanabe ,Kingirou Iwahashi ,
Eiichi Sibusawa

1. はじめに

2013 年 9 月、東京都台東区谷中で 5 連の鋸屋根工場が解体された。解体時は印刷会社が使っていたが、1894 年から、リボン工場として紳士用の帽子や女性のドレスにあしらう絹のリボンを製造していた。

会は、鋸屋根部材（2 × 2 連分）、103 点の明治期の洋書を中心とする繊維関連文献（含むリボン見本帳、渡辺四郎ノート）、リボン現品の保存活用を目指している^{1, 2}。

工場の歴史を再確認すべく調査を行った結果、



写真 1 北側に窓を持つ鋸屋根工場（2013 年）

2015 年 11 月 30 日 受理

こうした資料、聞き取りから谷中初音町 4 丁目の特徴として、以下の 2 点がある。

1. 川に沿って開発されてきた低地が町域の多くを占めている。
2. 明治期の早いうちから産業が栄えたが、第 2 次世界大戦での被害が、他の谷中地区より比較的甚大であり、1945 年以降は他の谷中地区よりも町の変化が急速だった。

3. リボン工場の沿革とリボン製造に関わった経営者・技師たち

3-1 リボン工場の建物と沿革

このリボン工場は、北側からの採光を取り入れる建築当初の小屋組と屋根形状を残していた。これまで持ち主等への聞き取り調査で、千代田リボン製織が 1910 (明治 43) 年の創業であることから、同年の建築であると思われていた⁷。

2008 (平成 20) 年、地域の産業の記憶を残す建造物として、東京芸術大学美術研究科大学院文化財保存学専攻保存修復建造物研究室によって実

測調査が行われた。この時の調査及び、解体時の追加調査では、鋸屋根工場の建築年を確定する棟札等の資料は発見されなかった。しかし、実測調査した架構式構造が、1889 (明治 22) 年に建てられた倉敷アイビスクエア (旧倉敷紡績本社工場) と類似していることから、明治末ではなく、中頃の建築ではないかと推測された⁸。

『東京織物製造同業組合沿革史』⁹に 1941 (昭和 16) 年に行われた座談会が掲載されている。そこに記された、当時の千代田リボン製織所代表鈴木哲の談話の要旨と、工場長であった青木道蔵の親族の私家本『ふたりで織りなす』¹⁰、『野澤組社史資料』¹¹、渋沢記念財団 HP¹²等を参考にしながら、簡単な年表 (表 1) を作成した。

3-2 渋沢栄一と谷中

今回の論考の発端の一翼を担ったのは渋沢栄一である。1840 (天保 11) 年に武蔵国榛沢郡血洗島 (現・埼玉県深谷市) に生まれた栄一は、1867 (慶応 3) 年のパリ万博に徳川昭武の随員として渡欧。

表 1 千代田リボン製織所に至る名称と関係者

年	会社名	所在地	経営者・技術者
1889	日本製帽会社設立	小石川区氷川下	渋沢栄一ら
1892	東京帽子株式会社設立 (日本製帽会社を解散、継承)	同上	渋沢栄一ら
1894	岩橋リボン製織所設立	下谷区谷中初音町	岩橋謹次郎
1895	初音合資会社設立 (帽子製造)	同上	野澤卯之吉・野澤源次郎
1896	岩橋リボン製織所匿名組合 (岩橋リボン製織所を継承)	同上	岩橋謹次郎・渋沢栄一 (組合員)
1900	帝国製帽株式会社設立 (初音合資会社を継承)	静岡県浜松八幡地	野澤卯之吉 青木道蔵、岩橋リボン入社
1904	岩橋リボン製織所、匿名組合を解散	同上	岩橋謹次郎
1906			この頃、渡辺四郎・鈴木哲入社
1907	東京リボン製織株式会社設立 (岩橋リボン製織所を買収)	同上	由比彦太郎 (三井系)
1907~11			青木道蔵退社。渡辺四郎退社後渡仏、帰国後復帰 (1910)。鈴木哲退社
1910	千代田リボン製織株式会社設立 (東京リボン製織株式会社買い取り)	同上	渡辺四郎
1921		同上	渡辺四郎死去 (40 歳)。経営は渡辺一族系列企業として継続。
1927	千代田リボン製織所設立 (千代田リボン製織株式会社より譲渡)	同上	鈴木哲
1966	千代田リボン製織所、リボンの生産終了	同上	鈴木博之

翌年帰国したときは大政奉還後であった。

栄一の従兄弟にあたる渋沢平九郎は彰義隊に参加し戦死。渡欧がなければ栄一も彰義隊に参加していただろうと言われている。栄一と谷中の関係は深く、維新後に寺域の多くを没収された上野寛永寺の借地経営や谷中霊園の開発に尽力し、自らの墓所も徳川慶喜の傍らに決めた。また、民間にあって500の企業を起こしたなかに、輸入に頼っていた帽子の国産化があった^{13、14}。



写真2 日本で初めての帽子写真といわれる渋沢栄一¹⁵ (左)と、写真3 カンカン帽を被った野澤卯之吉 (手前)と源次郎¹⁶ (右)

3-3 野澤卯之吉と野澤源次郎

野澤卯之吉(1838-1918)は三河吉田城下(現愛知県豊橋市)に生まれ、2015(平成27)年には、創業145年を迎える貿易商社株野澤組の創業者である。率先して断髪し、早くから帽子の製造を試みた。1895(明治28)年、子息源次郎が海外視察から帰国したのを機に、初音合資会社を谷中初音町に設立。わずか1年で事業拡張のために浜松へ移転し、帝国製帽を設立する¹⁷。

帽子製造に苦心していた1883年に、源次郎は、後に日本初の洋式国産リボンの製造を行った岩橋謹次郎の妹貞子と結婚していることから、番地の確定はできなかったが、初音製帽と岩橋リボン製織所の所在地はほぼ重なりと推定される。また、卯之吉の甥にあたる山内勝作が彰義隊士として上野寛永寺で戦い、敗走先の向島の染物屋に匿われたのちにその娘と結婚、染物業を営んだエピソードは、渋沢栄一とのつながりを想像させ、谷中に工場を持った要因にもつながる¹⁸。

岩橋リボン製織所は創業当初から渋沢栄一らの支援があった。途中、匿名組合になり、数年で組合は解散している。道蔵のほかにも、渡辺四郎、

鈴木哲という技師を招聘したにもかかわらず、東京リボン製織(株)に買収された経緯は調査しきれていない。原典には照会できていないが、三井と関連のある東京リボンに買収された経緯に触れる文章を引く¹⁹。

岩橋リボンの買収を報道した明治40年1月19日の時事新報の記事によると

「此の頃のリボンの消費額は年額二百万円から二百五十万円となり、現在の国内生産では輸入を阻止できるところまでいっていないので、今回三井が資本金百万円のリボン製織会社を創立することを三井同友倶楽部で発表、株式募集に着手した。新会社は谷中の岩橋リボン工場を買収して、創立後直ちに事業を開始する」

というものである。

3-4 岩橋謹次郎と青木道蔵

岩橋謹次郎(1861-1912)は和歌山に生まれ、慶應義塾に学んだ後に渡米。白木屋呉服店支配人の傍ら桐生織物(株)重役を兼ねた。1894年に財界有志の協力を得て、これまで国産にはなかった髪掛けリボンや帽子用リボンを製造するために、「東京市下谷区谷中初音町四丁目三十八、蓮池が点する閑静で広大な敷地に、織物に適した採光の設計による工場を建て創業」²⁰。この建物こそ、2013年までその一部が同地に残っていた、谷中の鋸屋根工場であると考えられる。工場の正門前には道路に並行して川が流れていた。

謹次郎は、白木屋で販売するリボンが輸入品であり、50%の輸入税が課せられたために仕入れ価格が高いことから、製造に意欲を持ち、桐生織物のつながりから人材を探して、青木道蔵を招聘する。道蔵の月給は25円、出生地熊谷の村長や校長の給料より高いものだった²¹。

3-5 渡辺四郎と千代田リボン製織(株)

今回の論考のもう一翼が渡辺四郎である。残された文献のなかにある自筆ノートからは、勉強家で几帳面な性格がうかがわれる。1880(明治13)年、渡辺財閥の四男として生まれ、学生時代は鉄道写真の撮影に写真家と全国を回り、東京高等工業学校を卒業し技師として岩橋リボン製織所に入社。

写真4 岩橋謹次郎（中央）の左後ろが青木道蔵²²

その後もリボンの研究に渡欧、岩橋リボンを買収した東京リボンの後を引き受けて千代田リボン製織株の社長となった。

東京渡辺銀行をはじめ、系列企業の多かった渡辺家において、四郎の関与した会社は千代田リボン以外に2社しかない。実業家というより技術者としてリボンの生産に携わった四郎の人柄を伝える文章を引用する。

渡辺技師の父親は東京の地所持ちとして知られる渡辺銀行、あかち貯蓄銀行の経営者でもあった渡辺治右衛門であった。渡辺技師は端正な顔立ちの、物静かな多少神経質とも思われるところもあって、職場の人達との猥雑な酒の席は苦手だったのだろうが、進んで参加した²³。

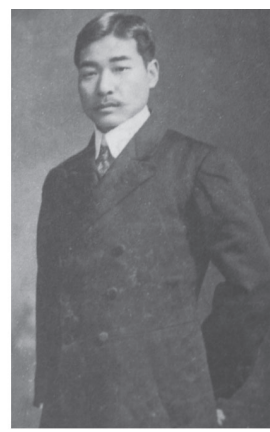
次は、四郎長女、卜部秀の聞取りの抜粋²⁴。

父は谷中初音町でリボン工場を経営していました。ほかの会社には関係せず、内幸町の自宅から自動車通っていたそうです。欧州で織物研究をしていたころ、なぜか潔癖症になり、寄るな触るなという風で、(子供が)家に帰ると全部着替えさせてアルコール消毒させられたんです。

四郎は1921(大正10)年、40歳で死去。千代田リボン製織には社長渡辺四郎のほか、取締役兄渡辺勝三郎、弟渡辺六郎、八田熙(六郎の大学の同期生)がおり、四郎没後も渡辺家の系列企業であった²⁷。

3-6 鈴木哲と千代田リボン製織所

1927(昭和2)年、東京渡辺銀行が倒産する。

写真5 岩橋リボン製織所に入社した頃の渡辺四郎(左)²⁵と鈴木哲²⁶

千代田リボン製織は四郎とともに技術者として岩橋リボンに入社した鈴木哲に譲渡され、千代田リボン製織所となった。哲は「沈着冷静な人柄で、寡黙ながら職場の人達との付き合いも良く、酒も強かった」²⁸という。

哲は明治の終わりに転職のため一度は千代田リボンを退社している。今回、渡辺家没落後に千代田リボンを引き受けた経緯までには調査が至らなかった。

4. 文明開化とリボン

4-1 リボンの定義

リボンという言葉は、1864(元治元)年、清水卯三郎『英米通語』に「ひも＝リボン」とあり、日本初のリボンの語の使用例と言われている。1871年発行、橋爪貫一『世界商売往来』にも「Ribbon＝リフブオン＝紐」の言葉が見られる³⁰。

1944(昭19)年発行、『東京織物製造同業組合沿革史』³¹によると「リボンとは両耳ある細幅織

写真6 千代田リボン製織所の園遊会(昭和初期)²⁹

物にて絹・人絹及びこれらの交織物の地合薄き織物にてその幅四分の一吋(約6mm)より七吋(約178mm)までありてその内頭髮の裝飾に使用するものは四吋(約102mm)乃至五吋(約127mm)幅位が最も需要される」とある(mmは筆者追記)。

世界でのリボンののはじまりは、オランダ語のリントモーレン(Lintmolen)と呼ぶ小幅の織物を織る手織機を指し、リントはリボンの意という。工業的なリボン生産に、多条機(細幅織物を一度に何本も織る)は、欠かせない。「十八世紀イギリス文化の特質－オランダ織機(おりばた)を通じてみた」³²には、多条機の初期の話がある(以下要旨)。

オランダ織機は、英語ではダッチルーム(Dutch loom)つまりオランダ渡りの手織機程の意味合いで、イギリスマンチェスター中心に使われた。オランダ語のリントモーレン(Lintmolen)と同じもの。このリントがリボンの意味。リボン、テープを織る非常に小幅の織物機。効率化を目指し、多条機を開発。この手織機を特にダッチルームと呼んだ。オランダからイギリス、ヨーロッパ各地へ広がった。リボン織機は16世紀後半、ダンツィヒ(現・ポーランドのグダニスク)で、ある織布工が、一台の機械で一度に四本か六本のリボンを織れるからくり機を発明したが、中世のギルドに同業者の職を脅かすとして、市当局がその男を捕らえ、絞首刑か水に沈めて殺し、からくり機を禁止した。

ダッチ・ルームはその後、欧州各地で既存の小規模生産者やギルドの激しい抵抗に遭う。背後で既存の(リボン生産)体制を支配し利益を得ていた都市貴族や支配者階級は、厳しい規制と禁止を繰り返す。ロンドンでも同様だったが、内陸のマンチェスターは当時例外的にギルドや支配層の関与が無い自由都市だったため、ダッチルームが自由に使え、多条機によるリボン織物が発展した。

綺麗なリボンの後ろには壮絶な歴史があること、工業都市マンチェスターの成因にも細幅織物が関わっていることは興味深い。

リボンの定義に話を戻すと、両方に耳がある細い織物ということであるが、東京リボン(株)会長川原正和氏の説明では、「当社は小間物を仕入れて商うことが主だったが、明治か大正の当社の前身が、リボンを製造した時期がある。しかし、広幅の反物を切って、耳の始末をしてリボンとした」と言うことだった。

リボンを含む細幅織物の現在の定義は、幅130mmとも160mm以下とも言われる織物。『福井県繊維資材工業組合統計』³³では、次の分類である。

- ①織マーク(ネーム)、②織リボン、③畳縁、④帯、⑤ひも類

①織マーク(ネーム)とは、洋服の襟裏などにつく、タグのことである。②織リボンでは、用途により、包装用と服飾・装飾用に分かれる。明治時代後半では、前述以外に下駄の鼻緒、パラシュートベルト、包帯、勲章の綬、女性の洋装等の用途もあったと考えられる。

4-2 リボンの需要

関連する西洋式の帽子および女性の髪形を中心として、リボンを需要の面から考えたい。

男性

リボンは、帽子の重要な欠かせない材料のひとつであった。帽子は、西洋化のシンボリック的存在でもある。そもそも1889年、渋沢栄一が、東京帽子の前身、日本帽子を創立したのは、帽子の輸入量の急増により国内資金の海外流出を防ぐためであった。1871年断髪令、1873(明治6)年天皇断髪で、男性には、断髪が進んだ。と同時に髷がなくなり頭が寂しくなって帽子をかぶる者と、一部には、髷を隠すために帽子をかぶる者もあったという³⁴。髷は、1882(明治15)年で2割になり、バリカンが輸入された1883年から1885(明治18)年で消えた³⁵。もう一つ帽子需要で見落とせないのは、軍隊と官吏である。官吏も権威付けのため制帽が必須であった。1880年には官吏は4万人弱、1894年には、軍隊は24万人にのぼる。

大正時代の帽子事情には、第1次世界大戦と関東大震災が大きな影響を与える。前者で輸入が途絶え、後者で東京の産業が大きな痛手を被る。

男性の冠帽率は、大正末にはカンカン帽では

ば 100% となる。冬用は中折、烏打帽が主で、当時の日本の人口約 6 千万人の半分が男性とし子どもを差し引いて、約 2 千万人分の帽子を生産したことになる。約半分にリボンありとしても、約 1 千万碼（ヤード）のリボンが必要になる（帽子 1 個に 1 碼）。福井・東京の生産額が一段階増え、1928（昭和 3）年の急上昇に表れる（図 2）。

女性

明治は男女平等社会ではなく、女性に関する文字情報自体が少ない。また、社会情勢による流行と男女差別によって、近代（洋風）化と復古の間を振り子のように行き来させられる部分が多い。

例外として上流階級の女性の社交用の帽子は記録がある。鹿鳴館（1873 年）が完成、貴族婦人の間で帽子の流行があるが、輸入品である。女性の帽子が風俗画に出てくるのは、大正期の断髪髪の登場を待つことになる。一般女性の例外としては、看護帽があった。

しかし、髪飾りとしてリボンは登場する。束髪（夜会巻き、庇髪、マーガレットなどなど、多数の髪型も束髪の変形）とその都度、飾り物の流行が変わっていくのも明治風俗の特徴である。日本

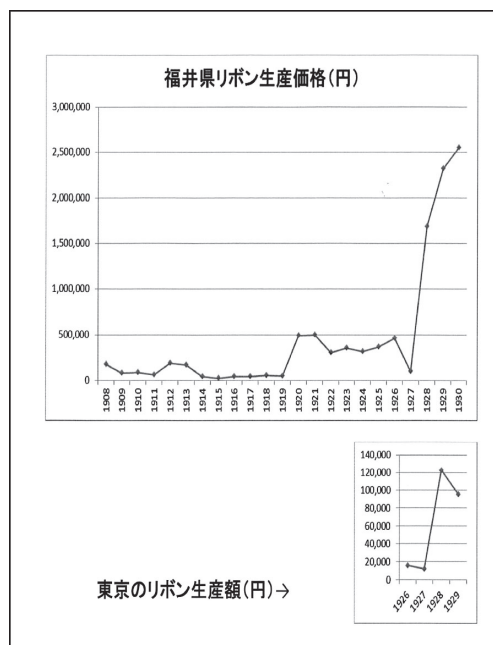


図 2 福井・東京のリボン生産額（円）比較
・東京府統計³⁶・福井県史資料編 17（1993）³⁷を
もとに作成（項目は原則リボンを収集（1926-29
福井のみリボン・テープ））

髪、束髪、リボン、造花、明治後期には真珠や飾り櫛、と変転する。

「女学生のリボンー服飾に見る近代女性のモラルの変容」³⁸によると、

一般女性洋装のはじめは、手軽なりボンとハンカチから／ファッションは制度と常に関係する。束髪は、活動的な髪型。近代女子教育に合致／それまでにあった婦徳（美しさ、清潔さ）に「飾る」が加わる「飾る」モラルが加わり、消費と結びつく／若い女性にとってリボンは、はかない動きで西洋文明を己れのものにできる手段／百貨店の存在が普及の原動力となった。女性が安心して買い物が出来る。広告戦略に装飾品を多用など。東京では三越に続く白木屋／リボンは身分階層の差異化のシンボル、背景には、制度や戦略が大きく働いていた

リボンを身につけることが、男性とは大きく異なる道を辿っていたことには、間違いのないであろう。



図 3 風俗画報
350 号（明治 39）
表紙³⁹

東京と大阪の違い

明治時代の庶民の流行を知るため、『風俗画報』（図 3）から情報を得る。

- ・衣服界の流行：従来我国の流行は名古屋を境界として東西其趣を異にして居たが、近年は種々の原因からして此の東西の両流行が次第に接近して来て、東京が流行の本源となって来た様だ『風俗画報 389』⁴⁰
- ・束髪：島田髷の都と云ひ度い位の大阪に対して、東京は確かに束髪の都でありましょう。大阪や京都では未だ東京で流行って居る丸髷の束髪や、その他の精巧な束髪を見るこ

とが出来ません、東京の30歳前後の婦人の束髪に近い前髪の詰まった格好で、女学生は髷を丸く結び20歳以上の婦人はS巻にして居ますが、一体に東京と比べると大変に小型で老けて見えます。庇髪も相当にあります近頃東京風を習って髷ヘリボンを掛ける人も大抵1時前後の細いリボンに限られて、東京のように3時5時6時という広い綺麗なものを着るものは皆無です、それからマガレットやお下髪を極く少数で別けて下髪は小学生の一部が結って居る位

・髪装飾品：東京の女学生間では近頃頻りと白地に織出しのリボンや縞のリボンや前にいつた幅廣のリボンが用いられている様ですが、大阪やその他関西の女学校は夫れ等の規定が非常に厳格なので、結局学生達も風紀云々の問題を恐れ花々しい装飾を施している者が少ないから、束髪の幼稚なものも其装飾物甚だ振わないのも無理からぬ次第であらう『風俗画報393』⁴¹（一部旧書体を変更）

「東京が流行の本源」「東京は確かに束髪の都」「東京は3時5時6時という広い綺麗な（なりボン）」という記述で、装飾系リボン需要の中心地が東京と考えて、よいようである。

4-3 日本各地の織物産業とリボン生産

紡績業の盛んな各地の明治時代について、リボン産業の関係を俯瞰したい。

京都

明治初年ころから京都西陣で礼装用の綬の類を製造と言われる⁴²。しかし、1901(明治34)年⁴³、1906(明治39)年⁴⁴の『京都府統計書第三編勸業編』には、リボン、細幅、小幅の統計はない。其他などの表示もあるが、数量の単位が「反」なので、細幅織物類とは考えにくい。洋式リボンの概念がないか薄いというのが、印象である。

大正時代に入り、第1次世界大戦がはじまり、輸入が止まったことで上物リボンは、京都西陣で生産を始めるようになったという⁴⁵。後述の見本帳B22に「京都京極某商社ニテ、十九尺二十五銭」メモ書きのある箔押風の蝶模様の美しいリボンがあるが、このようなものを指すのか。

福井

福井県は、現在の国内リボン産業の中心である。川崎リボン工業(株)(福井市)社長川崎健太郎氏は「福井のリボンのルーツは京都西陣、湿度など織物に適し、福井に多くの工場が移転」と語る。

福井のリボン開始年については、次の文献がある。吉田勇「りぼん製造業；地区分布では、南越地区(今立、鯖江、武生)が中心で、福井県のリボン製造工場の過半はこの方面に集中。当地におけるリボン製織の発端は明治37、38年頃でマークのそれより約10年古い」⁴⁶。なお京都であるが、亀井商店が洋服の裏地を使い片手間にリボンを作ったというのが、岩橋以外のリボン製造の今回調査範囲での具体的記述であった⁴⁷。

大阪・和歌山

1882年創業の大阪紡績は、紡績の近代化経営の牽引役ではあった。しかし、細幅織物やリボン統計は『大阪市史』『大阪府史』に見出せない⁴⁸。

大阪帽子事始めは、「慶応2年に陣笠、陣羽織の装束商竹内清兵衛がオランダ人着用の帽子をみて、まねて作る。蓮華帽子・大黒帽子・利休帽子を発明。このなかの利休帽子は明治20年頃茶人に大流行した」と記述。これら、いずれもリボン不要の帽子である⁴⁹。濱谷帽子(株)は、1894年創業であるが、後述する千代田リボン製織所に濱谷あて見本がある(見本帳B30)。

また繊維産業の統計は、綿、なかでもメリヤスとネルが大部分で、実用的な綿製品主体の繊維産業と推定される。また『和歌山市史』をみても大阪と同様の産業構造である⁵⁰。

愛知・三重

1886年(明治19)年、三重紡績会社を嚆矢とし、繊維産業の地であることは知られている。細幅織物の統計には当たらなかった⁵¹。

名古屋帽子協同組合HP⁵²によると、「明治8年ごろ熊澤又助、飯田萬次郎が共同で官制帽を、後藤與四兵衛が軍帽、トルコ帽、防寒帽を作り始めた」とあるが、やはりリボン不要帽子である。

東京

『東京府統計』にリボンの分類が登場するのは、「明治36年、私設ノ工場ノ二 リボン工場 数1 原動力用いる 職工数計30人 平均賃金男460厘、女220厘」⁵³が最初である。しかし、そ

の3年後の1906年には、「リボン」の分類はなくなる。すべての年度は確認できなかったが、その前後の年代には、「絹交織物」の項目はあるが、「リボン」はない。この1903年統計に突然リボンが登場したのは、洋式リボンが東京で生産され、目を見張る思いで統計を作成したように思えてならない。

各地を工業統計などで、概観したところ、東京が最も洋式リボンの生産時期は、早いといえる。

5. 譲渡資料の概要

谷中のこ屋根会が譲り受けた文献資料は全部で103点であった。その9割以上は、渡辺四郎の収集によるものである⁵⁴。

5-1 渡辺四郎洋書文献

譲渡された文献は、下記の特徴がある。

- ①大きく3分類できる。
 - a) 渡辺がヨーロッパに留学中や日本で取り寄せた繊維関係の洋書。
 - b) 国内外製と類推されるリボンの見本帳。
 - c) 渡辺が東京高等工業学校で学んだ際のノート類の製本されたもの。
- ②a) 文献の発行年は、1900年代をピーク（25%）に、1910年代（20%）と続く。1885年のDie Bindungslehre für Gewebe（織物のためのシリーズ）がもっとも古く（1880年代:2%）、1932（昭和7）年の和書が最も新しく、後の経営者鈴木哲の収集と推定される。
- ③繊維文献は、織機（23%）、製織（18%）、養蚕、製糸（7%）、織物のデザイン（5%）等。
- ④言語は英語（35%）、フランス語（24%）、ドイツ語（7%）、イタリア語（2%）、その他（5%）。
- ⑤分野別に見ると機械関係はドイツ語（50%）が多く、紡績、絹・撚糸、繊維、織物設計関係は英語のみ（100%）であった。
- ⑥四郎蔵書印の中で、国外住所が4冊ある。ロンドン:イギリス 3冊（1909, 10）。サンテチエヌ（1910）; フランス 1冊。
- ⑦リボン工場の経営に関する資料は皆無である。おそらく、四郎の没後に処分されたと推定される。

5-2 リボン見本帳・商品見本

譲渡資料のなかにリボンの現物があることが、

大きな特徴である。リボンは褪色も少なく、往時の産業を偲ばせるものである。

見本帳

完成リボンの見本帳16冊すべてを対象に調査を行った。

①舶来品が主と考えられるもの（8冊）。

渡辺四郎の海外コレクションの特徴。

産地は主にフランス、イギリスと推定／リボン材質は絹が多いが、あらゆる織り、色、材質が存在／海外リボンには、『フランスのリボン—サンテチエヌ美術館』⁵⁵と類似の模様や織りが存在。現地のコレクションと推定／エンブレムリボンがある。フランスのリボン産業の中心地サンテチエヌ市（Saint-Étienne）の主要産業の武具、鋤山、織機、1898の模様が織られたものがある（写真7）。これだけのコレクションは、資力、労力を含めた強い意志が必要。ここに渡辺四郎の「日本国内で装飾リボンを製作し、普及させる」という強い熱意が表れている。



写真7 サンテチエヌ市エンブレムリボン（左）



写真8 三越呉服店織りネーム（右）

②国産品が主と考えられるもの（7冊）。

千代田リボン製織（所）商品見本・国産品の
特徴見本リボンの横にメモなどの文字情報は、
極めて少ないが、以下が認められた。

【取引先の記述】東京帽子、齋藤メリヤス製造
工場ノ注文、大阪濱谷ノ注文、大黒屋光之助
注文、東京リボン商会

【年代】（明治）30年、31年製織、40年、41年
製織

【用途の記述】編シヤッチ（ニットか？）ノ紐、
サルマタノ紐

【職人名】青木道三（ママ）、青木トミ、富岡クラ、
堀越トク、大貫カエ

【織機番号】第六号機、第十号機、第十一号機、
第十二号機

【原料】経四十二ノ撚糸 緯毛糸十八ヤードニ
付キ三十四匁ノ割

【定価】一ヤール四銭五厘

【その他】千代田リボン製織（所）名見本帳の
2冊に、「工務課」、「仕上部」

織は平織、グログラン、ジャカード織、空目
（織ったリボンに圧を掛け空目模様をだす）、
縹子リボン（見本帳B31）等が確認され、色も
黒色から淡色まで豊富である。明治の年代メ
モが同封されていることから同社の明治期と
考えてよいようである（縹子以外見本帳B30）

③舶来品+国産品混在と考えられるもの（1冊）。

織ネームが20数点含まれる。織ネームと
は、ジャカード織で作成する洋服の襟裏
などに付くタグを指す。この中で、3枚
MITSUKOSHIGOFUKUTEN（1904-1928）が存
在（写真8）。

その他に、Y.Y.Manufactuer、加瀬洋服
店、衛生衣装東京メリヤス、SUPERIOR
UNDER WEAR 金世界、EXTREA HOSIERY
MANUFACTURED BEST WARRANTED、
STsukudaya TOKYO、TOKYO SUZUKI、TAI
CHONG COMPANY LTD.が読み取れ、台湾企
業もあり、輸出も行われていた（見本帳B21）。

商品や見本品と思われる現品（約210リール）

- ・材質は圧倒的に絹であり、続いて木綿、麻や毛
らしきものも存在する。
- ・織りは、帽子用と推定されるグログランを含む

平織が多い。

- ・リボンの幅は、20mm以上が約70%、20mm以
下が30%。広幅が多い。
- ・リボン用途は、目視観察では、帽子用は約30%
- ・タグ・メモ類としては、荷札状のタグが数片認
められ、「岩橋」「千代田リボン製織所」の文
字も認められる。
- ・「昭和15年6月15日」「パナマ用 昭和14年
11月30日」のタグ。
- ・品質保証書のような紙片が3枚存在した。アメ
リカの会社から発行されている。
- ・見本帳以外の現品は、戦前の昭和-鈴木哲時代
のものが主ではと推定された。

6. 文献資料からみる岩橋・千代田リボン製
織（所）機械設備

この内容に触れる文献として、『ふたりで織り
なす』と『東京織物製造同業組合沿革史』の2冊
が確認された。

- 1) 1884（明治17）年8月岩橋リボン；ドイツか
らの多条式の巨大な力織機14台を輸入。こ
れが我が国初の動力織機によるリボン製造。
製織機は薄いリボンのため特殊な機構を持
ち、耳の不揃いを防ぐため、杼はラック（軌道）
の歯車仕掛で静かに往復する。緯（横）糸は、
金弓装置の杼のスプリングで伸縮調整⁵⁶。（参
考；写真9）
- 2) リボンは多条式力織機なため、スチール製機
台が必須⁵⁷
- 3) 1901年ドイツ・ルードルフ社へ複雑な模様
髪掛リボンの織れる織機（56丁杼）発注⁵⁸

7. 技術力

白木屋の支配人だった岩橋謹次郎は、ヨーロッ
パで流行っていた髪掛リボンがやがて日本でも
大流行することを確認し、国産化を目指した。創
業時には輸入した機械はあっても技術力が伴わ
ず後日に譲り、帽子用リボンでスタートした。帽
子用は岩橋しかなかったため、注文が急増したが、
輸入リボンと同品質の要求から、クレームも多
かった⁵⁹。

そこで岩橋は、桐生の織物工場で修行した青木
道蔵を工場長に招き、品質の向上を図った。桐生
での道蔵は、明治最初の輸入織機ジャカードバツ

タンを導入した工場が実用化の軌道に乗った頃入社。絹や交織織物のスカーフや羽二重などを生産していた。研究熱心と柔軟な発想の資質もあり、数え 21 歳の徴兵検査の頃までに第一級の技術者になり、岩橋の多くの問題点を解決したといわれる⁶⁰。

まず、岩橋リボン入社と同時に技術刷新を託された青木は、「工具に若い人が多く、熟練者がいないことが問題」と指摘、作業現場に染色や織りの熟練者を外部から招いていった。

1901 年頃には、ますますリボン需要が高まり、前述のドイツからの輸入機械の到着を待って 2 人の技術者が採用される。鈴木哲（京都高等工芸）と渡辺四郎（東京高等工業）である。後に四郎は、フランスへ留学し、見本帳にみるような髪掛リボンへの造詣を深めたと推測される⁶¹。

青木差配の熟練者達の記録とは限らないが、1918（大正 7）年、東京工業学校染織科卒で新潟県染織学校教授の井上英治を「東洋一の千代田リボンの技師長に招聘」⁶²ともある。未知の分野にたゆまぬ努力で、品質を高めたと推察される。

8. まとめと考察－ここまでの到達点

1) 日本で最初のリボンの洋式動力織機工場は、1894 年創業の下谷区谷中初音町 438 岩橋リボン製織所である。東京以外の土地で岩橋リボ

ンより前にリボンの生産の痕跡は認められなかった。

- 2) 谷中初音町の土地は、低地で川があり、明治の初めから製造業が盛んであった。
- 3) 谷中の地は渋沢栄一も地縁がある。彼は、日本の近代化に帽子の国産化は必須と考え、製帽業も起こし、当然リボンの必要性も高まった。
- 4) 岩橋リボンの初期は、帽子用リボンの生産が主であったが、これだけに留まらず、必ずブームが到来すると見通し、薄く織りも複雑な髪掛や装飾リボンの製造を目指し実現していった。
- 5) 初音合資会社は、帽子が主でリボンは生産していない。
- 6) 帽子もリボンも輸入品の品質とは、大きくかけ離れての国産化であった。輸入機械とこれを使いこなすために熱心に取り組んだ技術者達の努力により、品質向上が図られた。
- 7) 特に千代田リボン製織の社長に就任した留学帰国後の渡辺四郎は、髪掛や装飾リボンの生産に意欲を燃やしたと見本帳などから推定される。
- 8) リボン需要の増加の背景には、富国強兵の制度や戦略による影響が大きいのではないかと。
- 9) 一般に普及する段階で、東京のリボンは大阪に比べ、幅広で色も豊富であった。
- 10) 岩橋リボンは三井財閥出資の東京リボン製織

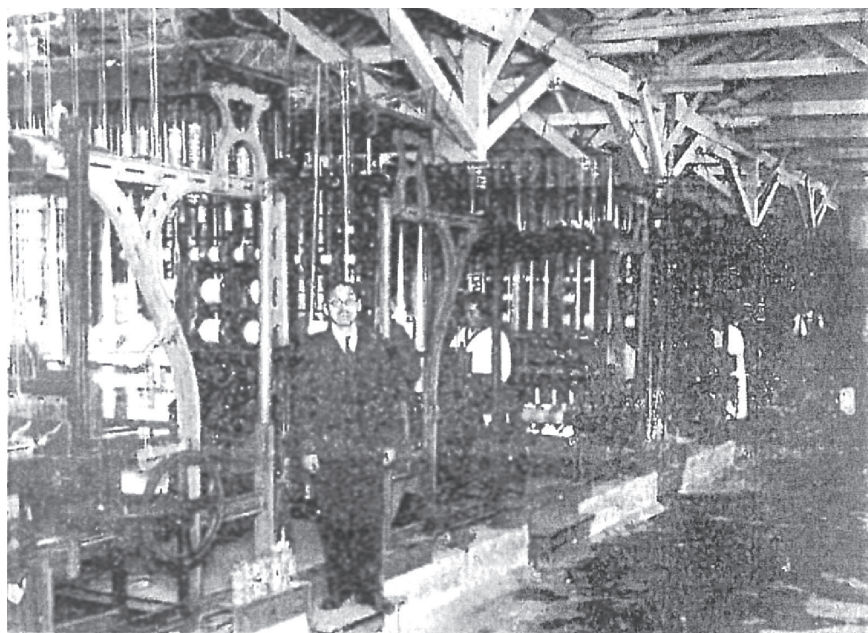


写真 9 千代田リボン製織所の一部（撮影年不明）⁶³

(株)に買収されたが、同じ三井系の百貨店三越の関わりが大きいのではないかと推察される。それほど当時の百貨店は、特に女性の洋装化への関与と影響は大きい。

- 11) 現リボン産業界の方々は「千代田リボンという名称は、知らない」と答える。国産化の先鞭をつけ、1960年代まで生産を続けていたにもかかわらず、リボン産業界から、なぜ忘れ去られることになったのかは謎である。

謝辞

(有)旭プロセス製版、澁澤倉庫(株)、鈴木晴雄氏、玉川寛治氏、平井東幸氏、田中直人氏、川崎リボン工業(株)、東京リボン(株)、(株)野澤組、日本化学繊維協会、公益財団法人渋沢栄一記念財団渋沢史料館、公益財団法人三井文庫、オーベクス(株)、福井県地域産業技術振興課、文京区立根津図書室、東日本繊維資材協同組合、三越伊勢丹ホールディングスに深謝いたします。

注

- 1 権上かおる、山崎範子、真鍋雅信、吉田喜一「東京台東区谷中の細幅織物（リボン）産業関連資料調査」（産業考古学会研究発表会 2015年）。
- 2 権上かおる、山崎範子、菊池京子、真鍋雅信、吉田喜一「東京台東区谷中細幅織物工場所有リボン現品調査」（産業考古学会全国大会 2015年）。
- 3 吉田敬子「鋸屋根に魅せられて」『ホワイエ 500号』（新建築家技術者集団東京支部幹事会 2013年11月）、8頁。
- 4 森まゆみ『「谷根千」地図で時間旅行』（晶文社 2015年）、75、90頁。
- 5 「藍染川すとりーと・らいふ」『地域雑誌谷中根津千駄木 3号』（谷根千工房 1985年）、68頁。
- 6 谷中のご屋根会編『谷中の「のこぎり屋根」谷中のご屋根と藍染川ファクトリーライフ』（谷中のご屋根会 2014年）、29頁。
- 7 同上「千代田リボン製織所の誕生」、12頁。
- 8 同上「2008年の現況実測調査」、20-21頁。
　　「働くのご屋根」、24頁。

- 9 稲見桂四郎編『東京織物製造同業組合沿革史』（東京織物製造同業組合 1944年）、197頁。
- 10 青木三郎著『ふたりで織りなす』（青木一能私家本 2011年）、109、121、140-141頁。
- 11 『野澤組社史資料』（株)野澤組 1965年）、23頁。
- 12 「渋沢栄一関連会社社名変遷図」公益社団法人渋沢栄一記念財団 HP（2015.11.22）
<http://www.shibusawa.or.jp/eiichi/>
- 13 森まゆみ「渋沢栄一と谷根千」前掲書 6、89頁。
- 14 平野力編『東京帽子八十五年史』（東京帽子(株) 1978年）、17-18頁。
- 15 同上、8頁。
- 16 岡村八寿子『士魂商才 野澤卯之吉翁伝』（私家本 2014年）、44頁。
- 17 『野澤組百年史』（株)野澤組 1981年）、11頁。
- 18 岡村八寿子 前掲書 16、30頁。
- 19 青木三郎 前掲書 10、141頁。
- 20 同上、109頁。
- 21 同上、120頁。
- 22 同上、121頁。
- 23 同上、420頁。
- 24 森まゆみ「大磯での生活のことなどート部秀さんのお話」（『地域雑誌谷中根津千駄木』19号）、20-22頁。
- 25 「千代田リボン製織所の誕生」前掲書 6、14頁。
- 26 青木三郎 前掲書 10、136頁。
- 27 小川功『企業破綻と金融破綻 負の連鎖とリスク増幅のメカニズム』（九州大学出版会 2002年）、260頁。
- 28 青木三郎 前掲書 10、420頁。
- 29 同上、143頁。
- 30 橋爪貫一『世界商売往来』（青山堂、1872年）、15頁。
- 31 稲見桂四郎編 前掲書 9、196頁。
- 32 大塚久雄「十八世紀イギリス文化の特質ーオランダ織機（おりばた）を通じてみた」（1980年度斎藤勇博士記念学術講演 1980年）。
- 33 「組合会員数・企業数の推移」『福井県繊維資材工業組合 45周年誌』（福井県繊維資材工業組合、2009年）、70頁。
- 34 東京帽子協会『東京の帽子百二十年史 明治・大正・昭和』（冬至書房 2005年）、63頁。
- 35 同上、19頁。

- 36 東京府『東京府統計表』(東京府 1928 年)、382-383 頁。
- 37 福井県「第 340 表 絹交織物産額 1890-1921」『福井県史 資料編 17』(福井県 1993 年)、405 頁、409 頁。
- 38 香川由紀子「女学生のリボンー服飾に見る近代女性モラルの変容」(東京女子大学紀要 論集 2010100315 (2015.11.25)。http://opac.library.twcu.ac.jp/opac/repository/1/5311/YukikoKAGAWA20100315pdf
- 39 「表紙」『風俗画報』350 号(東陽堂 1906 年)。
- 40 「衣服装飾 - 東西風俗の相違」同上(393 号 1908 年)、7 頁。
- 41 巴戟天「衣服装飾 - 衣服界の流行」同上(389 号 1909 年)、8-10 頁。
- 42 谷中のご屋根会編著 前掲書 8、197 頁。
- 43 京都府『京都府統計書』(京都府 1901 年)、134-136 頁。
- 44 同上、(京都府 1906 年)、167 頁。
- 45 稲見桂四郎編 前掲書 9、197 頁。
- 46 吉田勇「福井県細幅織物工業の現状と問題点」(『化纖月報』日本化学繊維協会 1966 年 8 月号)、12-17 頁。
- 47 東京帽子協会 前掲書 34、50 頁。
- 48 大阪市『大阪市史 第 5 巻』、(大阪市 1991 年)、356-367 頁。
- 49 東京帽子協会 前掲書 34、63 頁。
- 50 和歌山市『和歌山市第 3 巻』、(和歌山県 1990 年)、222-241 頁。
- 51 愛知県『愛知県史 第 3 巻』、(愛知県 1939 年)、424-447 頁
- 52 「愛知の帽子」名古屋帽子協同組合 H P (2015.11.25)。http://nagoya-boushi.org/rekishi.html
- 53 東京府「私設ノ工場」『東京府統計(明治 36 年)』、(東京府 1905 年)、382-383 頁。
- 54 権上かおる等(前掲論文 2)。
- 55 佐野敬彦編『フランスのリボン - サンテチェンヌ美術館』(学習研究社 1981 年)、図 8、18、35 など。
- 56 稲見桂四郎編 前掲書 9、197 頁。
- 57 青木三郎 前掲書 10、108 頁。
- 58 同上、135 頁。

- 59 同上、111 頁。
- 60 同上、57-66 頁。
- 61 権上かおる等(前掲論文 1)。
- 62 古山省吾 編「井上英治(千代田リボン技師長)」『両羽之現代人』(両羽研究社 1919 年)、52 頁。
- 63 稲見桂四郎編 前掲書 9、口絵。

谷中のご屋根会連絡先

http://www.nokoyane.com

補遺 1

3-3 野澤卯之吉と野澤源次郎の項では照会できなかったが、査読後に原典にあたることができた。補足として 1907(明治 40)年 1 月 19 日の『時事新報』8 頁に掲載された「東京リボン製織株式会社株式募集広告」を抜粋する。(一部旧書体を変更)

五割の輸入税を課かせらるゝリボンを内地にて製造する事は頗る有利の業なり 本邦のリボン消費高は現に二百五十万円と称し今後益々需要増加の勢ひあり 本社は最新式の器械を備へ完全なる仕上法を施し得る日本唯一のリボン工場也 本社は内地の供給をも度外視せざれども最後の目的は支那に対する輸出に在り 衣服の飾に多くリボンを用る支那数億人の市場は本邦の得意として極て絶好也 生絲安く労銀低く運賃廉なる日本の製品は勢ひ外国品を圧倒すべき筈也 本社は岩橋リボン工場を買収して其十ヶ年間の経験と老舗とを利用せんとす
資本金総額 金百万円
募集すべき株数 五千株
明治 40 年 1 月 東京リボン製織株式会社創立事務所

補遺 2

7. 技術力について、稲見桂四郎編『東京織物製造同業組合沿革史』(東京織物製造同業組合 1944 年、200 頁)の座談会で、以下のような記述があった。
渡辺四郎技師長の頃、「当時の職工数百六十人から百八十人を上下し、日産三千碼乃至三千五百碼、その八、九割は髪飾物、全国の九割までの生産」

Abstract: A former ribbon factory in Yanaka, Tokyo, was dismantled in September, 2013. Its roof was sawtooth-style. ‘Yanaka Sawtooth-Roof Heritage Society’ inherited some parts of roofs, from foreign books, Shiro Watanabe's note documents, sample books of ribbons, and ribbons from former owners.

We found two points through this research:

1. Iwahashi Ribbon Factory was established at Yanaka Hatsune-cho, Shitaya-ku* in 1896. This was the founder of the western ribbon industry in Japan, and we must note Eiichi Shibusawa, who was one of the most famous and influential entrepreneur, invested in the factory.
*Shitaya-ku was the old name of the place, and a part of present-day Taito-ku
2. Chiyoda Ribbon Factory took over the business in the Taisho era, and the firm had the largest scale and the best technology in the East Asian ribbon industry.

The reason why the ribbon industry began in Tokyo, and not in Osaka, was that Tokyo was the center of western civilization in Japan, and was also the gateway of the western culture in the Meiji era. Shiro Watanabe, the managing director of Chiyoda Ribbon Factory, managed the business handsomely. We report on the ribbon industry development during the Meiji era in Tokyo, the center of civilization and enlightenment and further discuss the impact on the apparel industry as well as the fashion scene in those days.